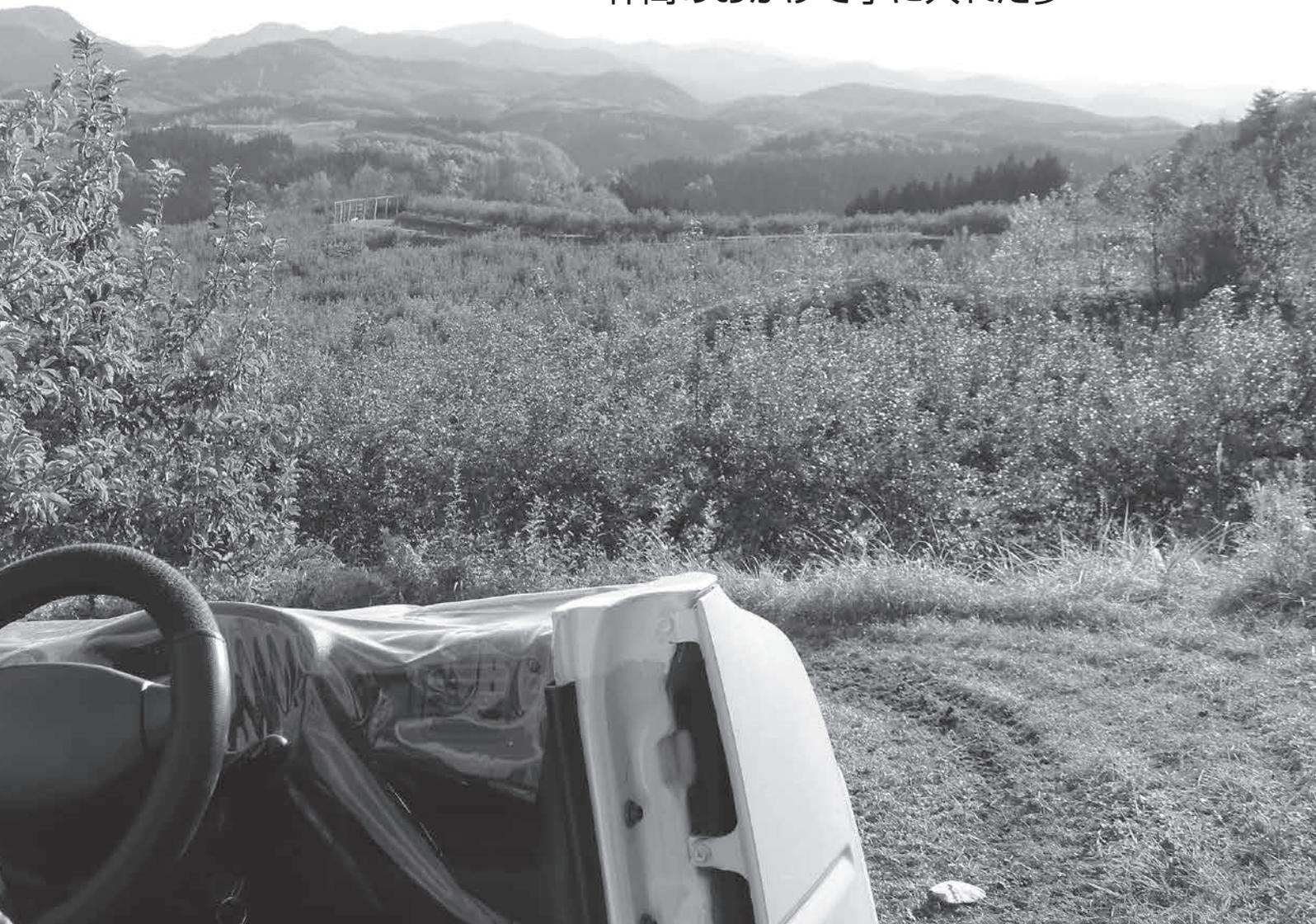


MY DREAMS COME TRUE

～仲間のおかげで手に入れた夢～



紹介

名前 今 祐介

年齢 35歳

生まれ 藍内

略歴

旧相馬村立相馬小学校卒業

旧相馬村立相馬中学校卒業

H15年3月

青森県立柏木農業高等学校卒業

卒業

H15年4月

有限会社清野農園 入社

R1年12月

有限会社清野農園 退社

R2年1月 就農

今年、青年部員から新たな農業者が誕生した。「いつか



I HAVE A DREAM

今さんは、4年前に行われた青森県JA青年大会の「青年の主張」の部で「I HAVE A DREAM 私には夢がある。それはいつか自分の畑を持って農業の道を歩むことだ。」と発表した。

今さんは今年、17年間務めた会社を辞め、自分の畑を持ち、夢を叶える為の一步を踏み出した。

今さんは柏木農業高校卒業後、建築関係で仕事をしようと思えば就職活動をしていた。しかし、思うように就職の内定をもらうことが出来ずにいた。そこで高校の先生

に相談したところ、「有限会社清野農園」を紹介してもらい、「家も近い方がいいか。」と思い就職した。当時、今さんは自分で農業高校を卒業していることから、仕事は余裕だと思っていた。

しかし現場では社長に剪定鋸の持ち方から、しまいには歩き方まで注意される始末であった。このよつな日々が続く、仕事に嫌気がさしていた。

勤めて7年が経った冬に、社長から「このむつの樹を剪定してみろ。」と言われ、これまで社長の剪定を見てきたことを思い出しな

がら剪定した。そして社長に何度もやり直しと言われ続け、何が正しいのか分からずに剪定する社長の背中を見続けて勉強した。

その後は王林やジョナゴールドなどを切らせてもらい、自分の剪定したところに実が生り「りんご作りって奥が深いな。」「手間暇をかけると言つのはごつという事を言うんだな。」と思うよつになり、「これから農業に対してどのような姿勢で取り組めばいいのか。」と感じたことの無い感情が湧き上がっていた。

それから今さんは、作業全般の



自分の畑を持ち農業の道を歩みたい。」という夢を持っていた今祐介さんである。

今さんは非農家であり、農地や機械などを一から準備する必要があった。しかし、周りにいる部員や地域の先輩方の力を借り、今年夢を叶えることが出来た。

今月号では今さんの夢を叶えるまでの取組と、仲間との関わり等を紹介していきます。

主任として社長に様々な作業を任せてもらい、実すべり等の作業も任せてもらうようになった。

ある時社長から「おめ（お前）が実すべりしたところの樹、良い



仲間と農作業を楽しむ今さん

りんごばかり成ってる。」と言っ
てもらい、その時から今さんの心
には沸々と自分の畑で自分で栽培
していきたいと想い始めた。

それから今さんは独立のために
どのタイミングで退職し、就農し
ようか悩んでいた。

丁度そのころ、農業学校に通っ
ていた同級生が就農の為に地元
に帰ってきた。自分と同じ共通の仲
間ができたことがとても嬉しく、
仕事の話や農業に関係する真面目
な話をよくするようになった。

これまで友人と仕事の話をする
事が無かった今さんは、「話を聞
いてくれる仲間がいる事ってすご
い助かる。」と孤独感から解放さ
れた気分になった。

支えてくれる仲間や身近な先輩

今さんは就職と同時に、地域の
組織として初めて消防団に加入
した。団員のほとんどが農家の
先輩方であり、話す機会が何度か
あった。

就農した同級生はすぐにJAの
青年部に入部しており、地域の先
輩方とも交流があったことから入
部の誘いが何度かあった。当時、



様々な活動の場で仲間が増えた



ねぶた愛好会で出会った最高の仲間達

今さんは周りが農家で一人だけ農
家ではないという事に、大きな壁
を感じてずっと青年部への入部を
濁して断り続けていた。

しかしある時、同級生に「一緒
にねぶた愛好会にいかないか？」
と誘われ、行ってみるとそこには
地元を盛り上げようと活躍してい
た農家を始め、大工や会社員など
異業種の方達の姿が目についた。

そこで、当時ねぶた愛好会会長
で青年部長でもあった三上正人さ
んから「うちの青年部は勢いがあ
るし、みんなで地域を動かしてい
く事はすごく楽しい事だ。だか
ら入らないか？」と誘われ、断る
余地もなく青年部へ入部するこ
ととなった。

それからは育苗作業やもち米事
業、県外研修など様々な行事に参
加し、多くの人と出会うことが出
来た。

顔は覚えていても、あまり面識
のない同年代の人達と話す機会も
増えた。同世代なのに美味し
いご飯を作る為、自分の考えを持ち
ながら仕事をしている姿がとても
刺激的であった。

青年部などの組織で集まると必

ず話題になるのはりんご作業の話
であり、様々な考えで今さんが悩
んでいる事を本音で話し合い、解
決してもらったこともあった。

今さんにとって青年部は、仕事
や近況などの話を共有し、これか
らの自分たちの将来の姿を語り合
えるとても楽しい場である。これ
ほどまで大切な存在が身近にあっ
たことに気が付いた。

もしも、今頃青年部へ入部せず
に様々な活動に参加していなけれ
ば、今の考え方は別の人間になっ
ていたと話す。青年部では人と人
との繋がる事の大切さを実感する
ことが出来たと言った。

それと同時に、農家の後継者で
もある部員らとの関わりの中で、
農家を継いだ後の話などになると、
今さんはどこか羨ましいと感じて
いた。

そこで勤めていた会社の社長に
思いきって「いつか自分で畑をもっ
てリンゴを作って販売してみたい。
」という事を相談したところ、
社長からは「今のお前に何が出来
る、もう少し現実を考えてから話
さないと。」と厳しい言葉を掛けられ、
悔しい思いでいっぱいであった。

確かに間違ったことは言うて無いのは分かってはいたが、今の自分では自立していくには力不足で程遠いと感じた。

しかしこの出来事が今さんの中で漠然としていた夢がこれから何をすべきなのか、どこまでやる覚悟があるのかと決心がついた瞬間であった。

背中を押してくれた大先輩

今さんが10年以上踏みとどまっていた想いに背中を押した大先輩が、水木在家地区の三上正人さんである。

今さんと三上さんの出会いは約13年前のねぶたでの集まりの時であった。当時今さんは20代前半でとても勢いがあつたと言つ。三上さんは「こんなに元気のあるやつが農業をやれば、もっと相馬を盛り上げていく事が出来るのではなつか。」と感じてきた。

ある時、三上さんは何度かあるねぶたの集まりの度に今さんに対して「いつか集まった時に、周りの農家と同じ目線で皆と話をしてほしい。」と感じるようになっていく。

それからというもの、三上さんの心の中には今さんには是非就農して欲しいと思うようになり、逢う度に「農家にならないか。」と話しを持ちかけるようになった。

そして、ある日三上さんは今さんに提案した。「いつになったら農家になるんだ。このままではやりたい事をやる前に歳を重ねてやれなくなってしまうぞ。今しかできないんだからやってみようよ。」と熱く語つたと言つ。その瞬間に今さんの決意は固まった。三上さんが今さんに農家になってほしい理由は若くて元気があるから、という理由だけではない。清野農園での得た技術を活かすことも出来、何よりも農業に対してのやる気のみなぎっていたことが一番の強みだと感じたからであった。

また、三上さんがここまで今さんに寄り添う理由は、三上さんの就農する前との共通点があつたらだと言つ。

三上さんが就農したのは30代前半と、今さんの就農した年齢と近い。前職は相馬村役場に勤務しており、農家やJAとの関わりが多々あつたと言つ。その中で農家の高

齢化や人手不足等の地域農業の課題を目の当たりにし、自分が元気に働けるうちに就農するべきだと思つたと言つ。今さんも就農前に青年部に入部し、農家やJAとの関わりの中で様々な事を吸収し、やる気を感じた事から、三上さんは自分の経験から早めの就農を勧めたと言つ。

後日、17年務めた清野農園に就農することを告げると、社長は「せっかくこれまで覚えてきたのに勿体ない。でも独立したいという事を聞いてからいつかこの日が来るとは思っていた。」と話していたと言つ。今さんは会社の作業全般を行っていた為、社長にとつても大事な人が巣立つて寂しそう

な様子であったと言つ。

三上さんに背中を押してもらつた今さんは、その年に会社を辞めて就農することにした。

就農を決めた今さんは、早速知り合いの先輩農家に相談したところ、丁度借り手を探している1丁6反の畑があると言つ情報を知り、いきなりの大規模な広さの畑に今さんは少し抵抗を持った。その様子を察した先輩は「やってみればいいじゃないか。せっかく就農したいタイミングで借り手を探している良い畑があるんだから。あとは、前職でやってきたこともあるから、お前ならやれる。」と声をかけてもらい、その言葉に救われたと言つ。

三上 正人さん (50歳)
農家20年目
(三上さんの青年部時代の写真)



農家一年目を終えた今さんを見て、一からの就農でよくここまでやる事が出来たと感心していた。これから今さんには、経営をしっかりと学び、更に栽培面積を増やして大農家になって欲しいと話した。そして最終的には三上さんの後継ぎになって欲しいと笑顔で語っていた。

そして今さんのりんご作りが始まった。

アツと言う間の就農一年目

今さんは1月15日頃に剪定から始め、切り終わって見てみると、これまで教わってきた清野農園の社長と同じような仕立て方になっていることに気づき、改めて社長の存在の大きさを感じた。だが、これからは自分で栽培したい品種や方法で、剪定の仕方を変えていかなければだめだと感じたと言っ

また、就農して初めてつがるの葉取作業を行ったと言っ今さんは、「これは気が遠くなりそうだと思っ

て始めたが、やってみるとそんなことはなく、光の入り方などを考えて作業するのが楽しかった。これから先も工夫して楽しくできる

の作業は分かっていたと言っ。しかし、実際に自分で栽培してみ

て初めて知ったと言っ。今までは準備されていた薬剤を散布していたので、薬剤名や効果などは理解し

ていなかった。同時に薬剤に係る金銭面に関して戸惑ったという。初めての経営

で、自分はどれくらいの収入があり、どれほどの経費を見たらよい

のか不安を感じながらも良いりんごを育てようと、栽培管理に妥協はしなかったと言っ。また、反射シートを敷いて、剥

いでの作業や施肥の仕方などが初めてであったと言っ。そして初めての収穫作業のとき

感じていたのだが、とにかく今行なわなければならない作業を一生懸命取り組んでいたら、気がつく

と収穫作業が終わり、後片付けを行っていたと言っ。そして振り返ると、作業で何か



仲間たちと全力で遊ぶことも大切

頼れる相談相手

一番の相談相手

今さんがいつも困った時に相談するといっ5歳下の五所地区の三上裕民さん。青年部

員であり同じ消防団にも所属している。今さんは三上さんに何でも

話すのは話を真剣に聞いてくれ、真剣に答えてくれるからと言っ。今さんは全部が一からの就

農であり、自分のような親の後継ぎという立場ではないことから尊敬していると三上さんは話した。また、今さんには一からの



三上 裕民さん (30歳) 写真左

これからがスタート

自分の畑の作業が終わり、お世話になった先輩の畑に手伝いに行った。真っ赤で美味しそうなりんごを見て、自分もこうなりたい、こついうりんごを作りたいというような感情が湧いてきた。そして手伝いに来ていたのは今さんだけではなく、先輩や仲間たちもたくさん来ていた。その様子も見て、今さんは自分が思う仲間の大切さを改めて感じたと言いつつ。

また、いつか自分の作ったりんごを、師匠でもある清野農園の社長に自信を持って見せられるように、初心を忘れず勉強していきなると話した。

今さんの最終的な夢としては、仲間と一緒に清野農園のような会社を作り、農園を営んでいくことである。同時に、ブロンドリンドとして自分が作ったりんごを多くの人に食べてもらえるようにこれからも様々なところで勉強し、多くの事を学んでいきたいと意気込んでいた。



初収穫したりんごの選果は思いも格別



高密植栽培にも挑戦

編集者の声

今さんは4年前に青森県青年大会にて自分の夢である「自分の畑を持ち自分のりんごを栽培することだ。」と盟友達の前で発表し、それが今となって現実になっていることに感銘を受け、今回取り上げさせてもらい、常に向上心を持ちながら農業に取り組んでいることを感じた。

今さんの常に思っている向上心が周りの人達にも伝わり、手を差し伸べてくれたのではないかと思う。

また、インタビューの際に何度も仲間という言葉聞き、相馬の人たちの仲間意識の強さと、助け合いの精神の強さを感じた。青年部には今さんのように農家になる前から入部している部員が現在も在籍している。農家だけでなく、農家になる為の準備として入部する方も随時募集しておりますので、まだ就農していない人でも是非入部して頂きたいと思います。

今回紹介した今さんをはじめ、将来の農業者の夢を今後も青年部などを通して全力でバックアップして参りたいと思います。

～40歳までの方なら誰でも歓迎

ライスロマンクラブの応援作業等の地域貢献活動や栽培技術研修会、他地域との交流会、健康診断による自己の心身を見つめ直す等の活動を行なっています。

心強い仲間がここにいる

問い合わせは **84-3215**

J A相馬村本所 小野 迄

未来を担う若手農業者へ JA相馬村 部員募集中!!

